

## 令和 8 年度 全国高等学校総合体育大会 サッカー競技大会男子 大会総評

報告者：高体連技術部員 高橋克幸

### 1 大会概要

福島県固定開催となり 3 年目となった今大会は、7 月 25 日（土）から 8 月 1 日（土）までの 8 日間で開催。各都道府県予選を勝ち抜いた代表校計 51 チーム（東京都・大阪府・神奈川県・福島県の 4 府県は 2 チーム選出）が出場した。70 分（35 分ハーフ）ゲーム・インターバルは 15 分間・延長戦なし・PK 方式によるトーナメント戦を争った。8 日間で最大 6 試合という過密な日程、90 分ゲームのリーグ戦や 80 分ゲームの予選とは異なるレギュレーションでの実施であり、平素の戦いとは異なる環境への対応力が求められた。また、新ルール（交代の秒数制限やゴールキック・スローインの 5 秒ルールの適用など）が適用されたことも今大会の特徴の 1 つである。プレーの停滞を減らし、トランジションをさらに迅速化させる一因となった。

決勝のカードは、ともに初優勝を狙う府リーグ 1 部の「近畿大学付属高等学校（大阪府第 1 代表）」と、プリンス東海 1 部所属の「静岡学園高等学校（静岡県代表）」との争いとなり、2 - 1 で静岡学園が初優勝を果たした。

### 2 大会結果

優勝 静岡学園高等学校（静岡県代表）

準優勝 近畿大学付属高等学校（大阪府第 1 代表）

第 3 位 滝川第二高等学校（兵庫県代表）・熊本県立大津高等学校（熊本県代表）

### 3 決勝戦進出校 分析

#### 〈優勝 静岡学園〉

静岡学園は 2 回戦からの出場、大分高校・鹿島学園・旭川実業・大津高校・近大付属と計 5 試合を戦った。大会前と大会期間中に主力選手（主将⑦足立・⑥小田切ら）が怪で離脱する中での勝ち上がりであり、選手層の厚さを感じさせた。PK 勝ちが 2 試合（鹿島学園・大津高校）、16 得点 5 失点の勝ち上がりであった。「1-3-4-3」の陣形をベースに、旭川実業戦の後半や大津高校戦の後半、決勝戦近大付属戦の終盤には「1-4-4-2」の布陣変更を行うなど、相手と展開に合わせた柔軟な戦い方をした。サイドレーンには⑥小田切、②④高丘、⑪安永、⑭長坂ら突破力に優れ、個で優位性を発揮できる選手をそろえる。16 得点のうち、9 得点がクロスから生み出されており、特に⑥小田切の左足の高精度フィードやクロスは再三にわたりチャンスを作り続けた。③飯尾、④林、⑤保延（⑬新宮）の 3 枚の CB によるショートパスを主体としたビルドアップから攻撃の優先順位を意識した攻撃を展開。中央の突破を狙いつつも、相手が中央を締めるとサイドへ展開し、コンビネーションプレーや単独の突破でハーフスペースへの侵入を試みる。またシンプルなクロス

も多かった。ボックス内では得点王に輝いた⑨坂本が空中戦、地上戦ともに強さとうまさを発揮し、相手ゴールに迫り続けた。守備では、素早くコンパクトな陣形を形成し、ボールホルダーへ素早いアプローチを行って自由を与えない。プレスバックや囲い込みの意識も高く、相手の前進を阻止し続けた。ピンチを招いた局面でも、CB陣とGK①田邊を中心に最後は身体を張る粘り強い守備でゴールを死守した。

〈準優勝 近大付属〉

近大付属は1回戦からの出場で、国見高校・帝京安積・昌平高校・日章学園・滝川第二・静岡学園と計6試合を戦った。PK勝ちが1試合（滝川第二）、残る試合すべて2－1の接戦をものにしての勝利と、勝負強さが目立つチームであった。陣形は共通して「1-3-4-3」を採用。大会を通じてCB3枚とボランチ2枚のメンバーを固定し戦った。WBと前線3枚を試合ごとに変更することがあったが、出場メンバーはおおむね固定されていた。その分攻守にわたり練度の高い動きを見せた。また、応援席やベンチメンバー・スタッフの強い一体感を感じ、「ファミリー感」のあるチームの雰囲気も、短期決戦で好成績を修めた要因の1つと感じた。攻撃はロングボールをFW⑮久下ら3トップへ供給。セカンドボールを回収しながら前進を試みた。サイドの⑳福井は縦への推進力を持ち、フィードやクロスから相手ゴールへ迫った。トップ下㉑中澄はロングスローや高精度のキックを持っており、スローインを含めたセットプレーでチャンスを作り続けた。守備時は即時奪回を狙いつつ、「1-5-2-3」のミドルブロックを形成。前線3枚と中盤2枚の5枚で相手の自由な縦パスを制限し、後ろ5枚が前向きでボールにアタックできる状況を作り出す。自陣では一人一人の体を張った粘り強い守備と、CB⑥森の広範囲のカバーでオープンチャンスを作らせない。試合終盤まで強度の高い守備と闘志あふれるプレーを見せてくれた。

#### 4 本県代表 昌平高校

シード校（昨年ベスト8枠）である本県代表昌平高校は、2回戦から出場した。基本陣形は県大会から継続して「1-4-2-3-1」を採用したが、2回戦では⑮オツコロが先発し⑨立野と2トップで65分まで戦った。攻撃時には県大会同様、2CBと2ボランチの4枚でボールを保持し、両サイドバックを押し上げる。SHが相手ボランチ脇やライン間に位置し「1-3-1-6」の陣形で中央に厚みを持たせて相手プレスの狙いを外して前進、中央でのコンビネーションを軸に、サイドでの⑥松本の単独突破やワンツーなどのコンビネーションプレーでポケット侵入を試みた。ボールロスト後には中央に絞った選手たちがそのまま連続で素早くプレスを行い、即時奪回に成功するシーンが多く見られた。守備局面では前線の⑨立野を中心に献身的なプレスやプレスバックで相手の自由な前進を阻んだ。ボール保持をベースとする戦い方ゆえに、最終ラインのミスでピンチを招くシーンも多かったが、素早い切り替えと粘り強い守備、GK①土渕の好セーブを中心に凌ぎ、攻守にわたり主導権を握り続けた。

〈2回戦 高知中央（高知県）〉 1－0勝利

セットプレーからピンチを招くシーンがあったが、CB と GK を中心に無失点で切り抜けた。ボールを保持し続け、「1-4-4-2」のミドルブロックを形成する相手を意図的に崩すシーンが多かった。サイドチェンジをテンポよく行い、中央でのコンビネーションを主軸にサイドからポケット侵入を繰り返した。フィニッシュの精度を欠くシーンが多く、得点こそセットプレーからの1点のみであったが、相手ゴールへ迫り続けた。

#### 〈3回戦 近大付属（大阪府第1代表）〉1－2敗戦

この試合もボール保持に成功するも、相手のコンパクトな「1-5-2-3」のミドルブロックに苦しんだ。前線3枚が中央のレーンを完全に封鎖し、前向きでフリーな選手を作り出せない。縦パスに対しては相手最終ラインの5枚が前向きで積極的にアタック。2トップを採用し、ダイレクトアタックを行うもセカンドボールの回収もイーブンであった。5バックでピッチを広く使う相手の揺さぶりにスライドが間に合わず、右サイドからあげられたアーリークロスがそのままゴールへ入り、先制点を許す。さらに自陣スローインからのボール保持でロストし、ショートカウンターから追加点を許した。後半、SH をサイドレーンでプレーさせることで、手薄なサイドレーンからの前進、侵入が増える。⑥松本の左サイドからのインスイングのクロスがそのままゴールへ入り、1点を返す。その後もサイドからゴールへ迫れるものの、5バックで守られている分、ポケットへの侵入ができず、大外からのクロスやアーリークロスが多くなり、クロスが合わず追加点が生まれないまま、ゲームセット。クロスの質を含めたアタッキングサードでの課題が見えた試合となった。

#### 5 最後に

プリンス東海1部で首位を走る静岡学園の初優勝で幕を閉じた。本県代表の昌平高校は流動性・創造性にあふれた攻撃的なサッカーで準優勝校となった近大付属に対しても互角以上の戦いぶりを見せてくれた。下級生が多く出場し、今後のさらなる飛躍と成長が期待できるチームである。その昌平高校の打倒を目標に、県内すべてのチームがさらなるレベルアップを図り、その切磋琢磨による相乗効果で埼玉県全体の競争力向上を期待したい。なお、決勝進出の両校は、昨シーズンともに所属するリーグからの降格を経験し、全国大会への出場も叶わないという苦しいシーズンを送った両校であった。その挫折と悔しさをばねに飛躍した両校の活躍は、すべての選手および指導者に対して、夢と希望を与えるものとなった。